

水生生物調査結果（平成 25 年度）

1 目的

河川・海域定期調査の理化学的・物理的な水質測定では、その調査時点での水辺環境しか把握できないが、鳥類・魚類等の水生生物の生息状況は長期間の水辺環境を反映する。大田区環境基本計画で示されている基本目標 D「自然共生社会の構築」では、河川や池沼、臨海部の海辺などの貴重で多様な水辺環境を保全し、水辺環境のネットワークづくりを目指すとしている。本調査によって、より総合的に水質環境を把握し、環境保全対策を講ずるための資料とする。

2 調査地点

表 1 に示すように大田区内・地先の多摩川・呑川・内川・洗足池・運河海域において、平成 25 年度は専門家による委託及び現場実査時の観察により魚類・底生動物等調査、鳥類調査を実施した。図 1 に調査地点を示す。

表1 調査地点

水域	地点名	魚類・底生動物等	鳥類調査
多摩川	1.田園調布～鶉の木緑地	委託	委託
	2.六郷橋緑地	—	委託
	3.大師橋緑地	委託	委託
	4.羽田空港脇	委託	—
呑川	5.上流域(八幡橋付近)	委託	—
	6.中流域(養源寺橋付近)	委託	—
	7.上～中流域(境橋～御成橋)	現場実査	現場実査
内川	8.四之橋～諏訪橋	委託	—
洗足池	9.全域	—	委託
運河 海域	10.京浜島つばさ公園～緑道公園	委託	委託
	11.呑川河口～森ヶ崎の鼻	—	委託
	12.ふるさとの浜辺公園	—	委託



図 1 調査地点
1

3 調査時期

(1) 魚類・底生動物等

春期 平成 25 年 6 月 24 日～25 日、7 月 8 日

秋期 平成 25 年 9 月 18 日～20 日

呑川現場実査 平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月

(2) 鳥類

春の渡り期 平成 25 年 6 月 3 日～5 日

繁殖期 平成 25 年 6 月 26 日～28 日

夏期 平成 25 年 7 月 22 日～23 日、25 日

秋の渡り期 平成 25 年 10 月 2 日～4 日、21

越冬期 平成 26 年 2 月 3 日、10 日、13 日

呑川現場実査 平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月

4 調査方法

(1) 魚類・底生生物等

手網（タモ網）、投網、エクマンバージ採泥器等の漁具を使用し、採集を行った。採集した魚類・底生動物は、種名、分布状況などの記録を行い、写真撮影した。現場実査での観察は、目視・写真撮影のみとした。

(2) 鳥類

各調査地点を踏査し、目視観察及び鳴き声などで確認された鳥類の種名、個体数の概数などを記録した。

5 調査結果

(1) 魚類・底生生物等

表2、表3に調査結果を示す。なお、平成24年度以前の種類数の合計は、区職員による調査による。

表2 魚類調査結果

水域	多摩川				呑川			内川	運河海域
地点	田園調布 緑地	六郷橋 緑地	大師橋 緑地	羽田空港 脇	上流域 (八幡橋)	中流域 (養源寺橋)	境橋～ 御成橋	四之橋～ 諏訪橋	京浜島 つばさ公園
確 認 種	コイ	トビハゼ	スズキ	スズキ	ニホンウナギ	コイ	ニホンウナギ	スズキ	サッパ
	ギンブナ		ボラ	コトヒキ	マルタ	マルタ	コイ	シマイサキ	トウゴロウ イワシ
	オイカワ		トビハゼ	ボラ	ウグイ属の 一種※	ウグイ属の 一種※	キンギョ	ボラ	コチ属の 一種
	マルタ		マハゼ	ピリンゴ	ナマズ	メダカ	マルタ	ドロメ	スズキ
	ウグイ属の一 種※			マハゼ	ボラ	ボラ	ウグイ属の 一種※	ピリンゴ	コトヒキ
	モツゴ			ヒメハゼ	スミウキゴリ	マハゼ	ナマズ	ウロハゼ	シロギス
	スゴモロコ属 の一種				ウキゴリ		ボラ(稚魚・幼 魚)	マハゼ	クロダイ
	アユ				マハゼ		ハゼ科の 一種	アベハゼ	ボラ
	メダカ						種不明魚類1 (大)※	チチブ	ミズハゼ
	スズキ						種不明魚類2 (小)※		マハゼ
	ボラ								ヒメハゼ
	ウキゴリ								
	マハゼ								
	ヨシノボリ属 の一種								
ヌマチチブ									
種類数の合計 33種	14種	1種	4種	6種	7種	5種	7種	9種	11種
種類数の合計 24年度 9種	4種	-	2種	3種	2種	-	3種	-	3種
種類数の合計 23年度 5種	-	-	-	2種	-	-	4種	(河口) 1種	(ふるさとの 浜辺) 1種
種類数の合計 22年度 10種	2種	2種	-	2種	5種	-	5種	(河口) 3種	4種
種類数の合計 21年度 13種	4種	-	1種	2種	5種	-	5種	-	3種

注1) 六郷橋緑地における確認種は、鳥類調査時に確認されたものである。

注2) 呑川の境橋～御成橋は現場実査時に確認されたものである。

注3) ※のうち、ウグイ属の一種は「マルタ」の可能性があるので、種数の合計には含めていない。また、「種不明魚類1, 2」についても、確認されている他種と重複する可能性があるため、種数の合計には含めていない。

注4) 22年度以前の呑川上流域調査地点は、北の橋付近である。

注5) 24年度以前の種類数の合計は、区職員の調査で調査手法が25年度と違うため参考とする。

表3 底生生物等調査結果

水域	多摩川			呑川			内川	運河海域
	田園調布緑地	大師橋緑地	羽田空港脇	上流域 (八幡橋)	中流域 (養源寺橋)	境橋～ 御成橋	四之橋～ 諏訪橋	京浜島 つばさ公園
鉢虫綱		ミズクラゲ	ミズクラゲ			ミズクラゲ	ミズクラゲ	ミズクラゲ
花虫綱			タテジマ イソギンチャク				タテジマ イソギンチャク	タテジマ イソギンチャク
腹足綱	サカマキガイ		アラムシロガイ	モノアラガイ科 の一種	モノアラガイ科の 一種			アラムシロガイ
二枚貝綱		ムラサキイガイ	マガキ				ムラサキイガイ	ムラサキイガイ
		ヤマトシジミ	シオフキガイ				マガキ	マガキ
		ソトオリガイ	ワスレイソ シジミ					シオフキガイ
			ヤマトシジミ					ヤマトシジミ
			アサリ					アサリ
ゴカイ綱		カワゴカイ属の 一種	カワゴカイ属の 一種				カワゴカイ属の一 種	カワゴカイ属の一 種
ミズ綱					イトミズ目の 一種			
軟甲綱	ヌカエビ	ドロフジツボ	シロスジ フジツボ	ヌカエビ		モクズガニ	ドロフジツボ	シロスジ フジツボ
	テナガエビ	テナガエビ	ユビナガホン ヤドカリ	モクズガニ		種不明カニ類	シラタエビ	ユビナガホン ヤドカリ
	スジエビ	ユビナガホン ヤドカリ	マメコブシ ガニ				テナガエビ	チチュウカイ ミドリガニ
	モクズガニ	チゴガニ	チゴガニ				ユビナガホン ヤドカリ	コメツキガニ
		コメツキガニ	コメツキガニ				マメコブシ ガニ	タカノケフサ イソガニ
		ヤマトオサ ガニ	タカノケフサ イソガニ				チチュウカイ ミドリガニ	
		クロベンケイ ガニ					チゴガニ	
		アシハラガニ					ヤマトオサ ガニ	
		タカノケフサ イソガニ					クロベンケイ ガニ	
爬虫綱					クサガメ			
					ミシシippアカミ ミガメ	ミシシippアカ ミミガメ		
種類数の 合計	5種	14種	16種	3種	4種	3種	15種	14種
32種	26種			7種				
種類数の 合計 24年度 24種	0種	10種	15種	2種	-	2種	-	11種
20種	20種			4種				
種類数の 合計 23年度 14種	-	11種	7種	-	-	1種	-	-
13種	13種			1種				
種類数の 合計 22年度 18種	0種	10種	7種	1種	-	1種	-	8種
13種	13種			2種				
種類数の 合計 21年度 23種	0種	7種	6種	3種	-	1種	-	13種
12種	12種			4種				

注1) 呑川の境橋～御成橋は現場実査時に確認されたものである。
 注2) 22年度以前の呑川上流域調査地点は、北の橋付近である。
 注3) 24年度以前の種類数の合計は調査地点数が違うため参考とする。

魚類は9目14科33種(春期3目7科20種、秋期8目12科24種)、底生動物等は13目25科32種(春期11目22科29種、秋期10目22科25種)が確認された。

多摩川では魚類17種、底生動物26種が確認された。淡水域となる田園調布緑地は、調布取水堰に湛水域が発達し、その末端部には早瀬がみられる。岸際にはヨシ類などの植生帯がみられ、環境も多様となっている。また、大師橋緑地では広域な泥質干潟が発達し、環境省のレッドリストで準絶滅危惧に上げられているトビハゼをはじめ、ヤマトシジミやソトオリガイ、ヤマトオサガニなどの干潟生物が多数確認され、干潟に接して発達するヨシ帯はアシハラガニやクロベンケイガニの良好な生息環境となっている。河口に近い羽田空港脇はボラやマハゼなどの魚類、砂質干潟ではヤマトシジミやシオフキガイなどの良好な生息環境となっている。

市街を流れる内川や呑川は、護岸の施された小規模都市河川であるが、内川では魚類9種、底生動物15種、呑川では魚類10種、底生動物7種が確認された。特に干潮時に干出する干潟を有する内川では比較的多くの種類が確認され、護岸に面して設置された空石積部はクロベンケイガニの良好な生息環境となっていた。呑川では確認種類数はやや少ない結果となったが、上流側の護岸に面して植栽された植物帯内ではニホンウナギやナマズが確認され、升状に残された石礫河床にはモクズガニが生息していた。

運河海域である京浜島つばさ公園付近では、魚類11種、底生動物12種が確認された。干出する砂質干潟周辺では、シロギスやトウゴロウイワシ、コチ属の一種、クロダイなど、周縁性の魚類が生息するほか、転石下からはミミズハゼが確認された。

(2) 鳥類

表4に調査結果を示す。なお、平成24年度以前の種類数の合計は、区職員による調査による。

鳥類は、14目32科69種(春の渡り期:12目23科30種、繁殖期:10目22科27種、夏期:10目22科33種、秋の渡り期:13目26科41種、越冬期:11目22科44種)が確認された。

多摩川では58種の鳥類が確認された。河川の水面や岸边には、カモ類やサギ類、カメ類、カワウ、カイツブリ、オオバンなど水辺に生息する種が多く見られ、寄洲ではコチドリやイソシギが確認された。多摩川の岸際にはヨシ類などの植生帯がみられ、オオヨシキリやオオジュリンなどが生息していた。六郷橋緑地にはヨシ原に囲まれた干潟があり、メダイチドリやアオアシシギ、キアシシギ、絶滅危惧Ⅱ類であるセイタカシギ、アカアシシギなどが確認され、渡り途中のシギ・チドリ類の採餌場所となっていることが確認された。また、ミサゴ、トビ、チョウゲンボウなど広い行動圏を必要とする猛禽類も確認された。多摩川沿いの緑地では、広い草地に生息するキジ、樹林性のコゲラやエナガ、草地性のホオジロ、ホオアカ、アオジ、セッカ、タヒバリ、ツグミなど、陸生の鳥類も多く確認された。

呑川(上～中流域)では、20種の鳥類が確認された。カモ類は6種で、上流域で毎年確認されていたマガモが25年度は確認されなかった。一方、昨年度まで河口部でのみ確認されていたオオバンが、冬期、中流域でも多数確認された。また、1～2月にボラが大量に

遡上した際には、サギ類やカワウが通常より多く確認された。干潟がないため、シギ類は確認されなかった。陸生の種は3種のみであった。

洗足池では23種の鳥類が確認された。洗足池は、40,000 m²程度の水深の浅い閉鎖性水域であり、湧水や雨水により水位が保たれている。池の北東部には水生植物園が整備されている。また、池周辺の洗足池公園には樹木が数多くある。水辺に生息する種は11種確認された。そのうちカモ類は5種確認されキンクロハジロが最も多く、次にオナガガモが多かった。ホシハジロは少数が確認され、留鳥のカルガモ、アオクビアヒル(マガモとアヒルの雑種)は通年確認された。カモ類以外で個体数が多かったのはユリカモメであった。サギ類は少なく、コサギ1種が確認されたのみである。また、周辺に樹木が数多くあることから、コゲラやオナガ、ジョウビタキなど、樹林や林縁に生息する種が12種確認された。

運河・海域では47種の鳥類が確認された。森ヶ崎の鼻の干潟周辺では、カワウや絶滅危惧Ⅱ類であるコアジサシの群れ、採餌するメダイチドリやコチドリ、休息するヒドリガモやユリカモメなどが確認された。呑川河口では、個体数は少ないがコサギやダイサギ、ゴイサギ、ササゴイが確認された。京浜島つばさ公園では、スズガモやキンクロハジロが多く、個体数は少ないがカンムリカイツブリやハジロカイツブリなども確認された。また、ふるさとの浜辺公園の人工干潟の部分には人の立ち入りができないため、サギ類やカモ類の休息場所としてよく利用されていた。冬にはヒドリガモ、オナガガモ等のカモ類が多く、スズガモやカイツブリも確認された。園内の芝生広場では、ムクドリやツグミ、ヒバリの採餌行動が確認された。

6 重要種の選定

魚類・底生生物等の選定結果を表5に、鳥類の選定結果を表6に示す。

魚類では11種、底生生物等では12種、鳥類では30種が重要種として選定された。

表4 鳥類調査結果

種名	水名 地名	多摩川			洗池	運河・海城			呑川 境橋 ～ 御成橋
		田調所 ～ 鶴の森池	六郷橋池	大郷橋池	全域	京橋口芝公園 ～ 緑道園	呑川口～森崎 の鼻	ふるさとの浜辺 公園	
キジ	留鳥	○							
ヒトリガレ	冬鳥	●	◎	◎		○	○	●	○
マガレ	冬鳥	○		◎		○	○		
カマガレ	留鳥	●	◎	◎	◎	◎	●	◎	◎
アオクビアヒレ	留鳥				○				
ハシロガレ	冬鳥	○					○		
オナガ	冬鳥	○	◎	○	◎	○	◎	●	○
コガレ	冬鳥	◎	◎	○	○	○	◎		◎
ホシシロ	冬鳥		○	◎	○	●	●	◎	○
キクロハシロ	冬鳥		○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
スズガレ	冬鳥					●		◎	
カイツブリ	留鳥	○		○	○	○	○	○	
カムリカイツブリ	冬鳥			○		○			
ハシロカイツブリ	冬鳥					○			
キツネ	留鳥	◎		○	○	○	○	○	
ガア	留鳥	◎	◎	◎	○	●	●	◎	◎
ゴイサギ	留鳥		○			○	○		○
ササコイ	夏鳥						○		
アオサギ	留鳥	◎	○	○		○	◎	○	○
ダイサギ	留鳥	○	○	○			○	○	
チュウサギ	夏鳥	○	○	○		○	○	○	
ヨサギ	留鳥	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	○
バン	留鳥		○						
オオバン	留鳥	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
コサギ	夏鳥	○	○	○			○		
メダイチドリ	旅鳥		○				◎		
セイタカサギ	留鳥		◎	○					
スズサギ	冬鳥		○						
アオアシサギ	旅鳥		○						
アオアシサギ	旅鳥		○						
キアシサギ	旅鳥		○						
ソリアシサギ	旅鳥		○						
インドサギ	留鳥	○	○	○		○	○	○	
ユリカモメ	冬鳥		◎	◎	◎		●	●	◎
ウミネコ	留鳥	○	○	◎		○	◎	○	
セグロカモメ	冬鳥	○	○	○		○	◎	○	○
オオセグロカモメ	冬鳥					○			
コササギ	夏鳥	○				○	◎	○	
ミサゴ	旅鳥			○		○	○		
トビ	留鳥	○	○	○		○	○	○	
ガウサギ	留鳥	○	○		○		○		○
コウライ	留鳥	○			○				
チョウゲンボウ	留鳥			○		○			
モズ	留鳥	○	○	○		○	○		
オナガ	留鳥				◎		○	○	
シジュウカラ	留鳥	◎	○	○	◎	○	◎	○	
ヒヨドリ	留鳥							○	
ツメ	夏鳥	◎	◎	◎	◎		◎	○	○
イワツメ	夏鳥	○	○						
ヒヨドリ	留鳥	○		○	◎	○	○		○
ユナガ	留鳥	○							
スズメ	留鳥	○		○	○	○	○		
オオヨシキリ	夏鳥	○	◎	○					
セウカ	留鳥	○	○			○			
ムクドリ	留鳥	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
ツグミ	冬鳥	○		○				○	
ジョウビタキ	冬鳥				○				
ノビタキ	旅鳥	○							
インヘヨドリ	留鳥					○			
キセキレイ	冬鳥								○
ハクセキレイ	留鳥	◎	○	○	○	○	○	○	○
セグロセキレイ	留鳥	○							○
タヒバリ	冬鳥	○						○	
ガラアヒ	留鳥	○		○	○		○	○	
ホオロロ	冬鳥	○							
ホオアカ	旅鳥	○							
アオジ	冬鳥	○							
オオムシクシ	冬鳥		◎	○					
ホセインコ	外来種				◎				
種類数の合計	69	42	37	36	23	34	37	29	20
種類数の合計 (平成24年度)	41	19	14	21	13	20	19	14	15
種類数の合計 (平成23年度)	29	12	12	10	8	7	6	12	13
種類数の合計 (平成22年度)	38	17	23	8	21	8	12	10	13
種類数の合計 (平成21年度)	38	17	18	22	14	15	22	16	18

注1) 確認種類数の凡例 ○:10羽以下、◎:11～99羽、●:100羽以上

注2) 呑川の境橋～御成橋は現場実査時に確認されたものである。

注3) 24年度以前の種類数の合計は、区職員の調査で調査手法が25年度と違うため参考とする。

表5 重要な魚類・底生生物等の選定・区内分布

分類	目名	科名	種名(和名)	分布域	選定基準	
					環境省第4次 レッドリスト	レッドデータブック 東京2013
魚類	ウナギ	ウナギ	コホウナギ	呑川(上流域)	絶滅危惧 I B 類	絶滅危惧 II 類
	コイ	コイ	マルタ	多摩川(田園調布)、呑川(上・中流域)		留意種
	ナマズ	ナマズ	ナマズ	呑川(上流域)		留意種
	ダツ	メダカ	メダカ	多摩川(田園調布)、呑川(中流域)	準絶滅危惧	絶滅危惧 I 類
	スズキ	ハゼ	トビセ	多摩川(六郷橋・大師橋緑地)	絶滅危惧 I B 類	絶滅危惧 I A 類
			ミミズセ	運河海域(京浜島つばさ公園)		絶滅危惧 II 類
			ヒリンゴ	多摩川(羽田空港脇)、内川		準絶滅危惧
			ヒメセ	多摩川(羽田空港脇)、運河海域(京浜島つばさ公園)		準絶滅危惧
			アマセ	内川		準絶滅危惧
			チチブ	内川		留意種
スマチブ	多摩川(田園調布)		留意種			
底生生物等	マルスダレガイ	シジミ	ヤマトシジミ	多摩川(大師橋緑地・羽田空港脇)、運河海域(京浜島つばさ公園)	準絶滅危惧	留意種
	エビ	ヌマエビ	ヌマエビ	多摩川(田園調布)、呑川(上流域)		留意種
			シラタエビ	内川		留意種
			テナガエビ	多摩川(田園調布・大師橋緑地)、内川		留意種
			ズエビ	多摩川(田園調布)		留意種
		コメツキガニ	チガニ	多摩川(大師橋緑地・羽田空港脇)、内川		留意種
			コメツキガニ	多摩川(大師橋緑地・羽田空港脇)、運河海域(京浜島つばさ公園)		留意種
		オサガニ	ヤマトオサガニ	多摩川(大師橋緑地)、内川		留意種
	バンケイガニ	クロシケイガニ	多摩川(大師橋緑地)、内川		留意種	
	モクズガニ	モクズガニ	多摩川(田園調布)、呑川(上流域)		留意種	
		アソシガニ	多摩川(大師橋緑地)		留意種	
カメ	イシガメ	クサガメ	呑川(中流域)		情報不足	
8目13科23種				-	4種	23種

表6 重要な鳥類の選定・区内分布

目名	科名	種名(和名)	分布域	選定基準			
				絶滅の恐れのある野生動物 植物の種の保存に関する法律	環境省第4次 レッドリスト	レッドデータブック 東京2013	
キジ	キジ	キジ	多摩川(田園調布～鶴の木緑地)			絶滅危惧 I B 類	
カモ	カモ	スズガモ	運河海域(京浜島・ふるさとの浜辺)			留意種	
カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	多摩川(田園調布～鶴の木・大師橋緑地)、洗足池、運河海域			準絶滅危惧	
		カンムリカイツブリ	多摩川(大師橋緑地)、運河海域(京浜島)			留意種	
ペリカン	ペリカン	ササゴイ	運河海域(呑川河口～森ヶ崎の鼻)			絶滅危惧 I A 類	
		ダイサギ	多摩川、運河海域(呑川河口～森ヶ崎の鼻・ふるさとの浜辺)			絶滅危惧 II 類	
		チュウサギ	多摩川、運河海域	準絶滅危惧		絶滅危惧 II 類	
		コサギ	多摩川、洗足池、呑川、運河海域			絶滅危惧 II 類	
ツル	クイナ	ハシ	多摩川(六郷橋緑地)			絶滅危惧 II 類	
		オカシ	多摩川、呑川、運河海域			絶滅危惧 II 類	
チドリ	チドリ	コチドリ	多摩川、運河海域(呑川河口～森ヶ崎の鼻)			絶滅危惧 II 類	
		メダイチドリ	多摩川(六郷橋緑地)、運河海域(呑川河口～森ヶ崎の鼻)			準絶滅危惧	
	セイケカシギ	セイケカシギ	多摩川(六郷橋・大師橋緑地)		絶滅危惧 II 類		絶滅危惧 I B 類
		タギ	多摩川(六郷橋緑地)				絶滅危惧 II 類
		アカアシギ	多摩川(六郷橋緑地)		絶滅危惧 II 類		絶滅危惧 I B 類
		アオアシギ	多摩川(六郷橋緑地)				準絶滅危惧
		キアシギ	多摩川(六郷橋緑地)				絶滅危惧 II 類
		ソリアシギ	多摩川(六郷橋緑地)				絶滅危惧 II 類
	イソギ	多摩川、運河海域				絶滅危惧 II 類	
	ガモ	ゴアサシ	多摩川(田園調布～鶴の木緑地)、運河海域	国際希少野生動物植物種	絶滅危惧 II 類		絶滅危惧 I B 類
タカ	ミサゴ	ミサゴ	多摩川(大師橋緑地)、運河海域(京浜島・呑川河口～森ヶ崎の鼻)	準絶滅危惧		絶滅危惧 I B 類	
	タカ	トビ	多摩川、運河海域			準絶滅危惧	
ブッポウソウ	ガサヒ	ガサヒ	多摩川(田園調布～鶴の木・六郷橋緑地)、洗足池・呑川			絶滅危惧 II 類	
ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンゴウ	多摩川(大師橋緑地)、運河海域(京浜島)			絶滅危惧 I B 類	
スズメ	モズ	モズ	多摩川、運河海域(京浜島・呑川河口～森ヶ崎の鼻)			絶滅危惧 II 類	
	ヒヨ	ヒヨ	運河海域(ふるさとの浜辺)			絶滅危惧 II 類	
	ヨシキリ	オオヨシキリ	多摩川			絶滅危惧 II 類	
	ヒタキ	インコドリ	運河海域(京浜島)			情報不足	
	セキレイ	セウセキレイ	多摩川(田園調布～鶴の木緑地)、呑川			絶滅危惧 II 類	
	オオソバ	オオソバ	多摩川(六郷橋・大師橋緑地)			準絶滅危惧	
	10目19科30種			-	1種	5種	30種

7 まとめ

区内水域で水生生物(魚類、底生生物等、鳥類)調査を実施した。

魚類は9目14科33種、底生生物等は13目25科32種、鳥類は14目32科69種が確認された。

多摩川では101種、運河海域では72種の水生生物が確認された。多摩川・運河海域では水生生物の生息環境として、多様で良好な環境が整備されていることを確認した。内川や呑川の上流部でも生物の生息に配慮した環境が整備され、多摩川ほどではないものの重要種を含む水生生物が確認された。

洗足池では23種の鳥類が確認された。

重要種の選定にあたっては、①文化財保護法(昭和25年)、②絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成4年)、③環境省第4次レッドリスト(環境省2012年・2013年)及び④レッドデータブック東京2013(東京都環境局2013年)を基準とした。魚類・底生生物等では①と②、鳥類では①に該当する生物は確認されず、選定の対象とならなかったが、調査水域全体で計53種の重要種が選定された。

以上のことより今回、区内の水辺環境は、かなり良好で多様性があることが確認された。しかし、再開発や改修工事等により水辺環境は常に変化していく。この良好な環境を維持し、さらに人にも水生生物にもより豊かな環境が構築されるよう、今後も重要種を中心として水辺環境の変化に伴う水生生物の生息状況を把握するため、調査を充実させていく必要がある。